

平成29年度 山県市立いわ桜小学校学校評価（自己評価及び学校関係者評価）

職員による評価
保護者アンケート結果で、職員による評価とずれているもの

4:適切、3:ほぼ適切、2:やや不適切、1:不適切
以下の数値は、評価者の得点の平均点

重点	No.	評価項目	自己評価			達成状況 (○) や改善すべき点 (△)	所見及び改善策	学校関係者評価		
			十分	まあ十分	やや不足			不足	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
やさしく 「共生する力」	1	「なかよし班活動」（遊び・掃除）の充実、リーダーへの見届けと承認に努めているか。				△リーダー自身が理解不足のことがあり、事前の指導をさらに充実させる必要がある。 △なかよし班遊びの内容をさらに充実させたい（遊びの内容の工夫）。	やさしく「共生する力」 ○子供たちは、学校が楽しく、友達を大切にしている状況にあるといえる。今後も「なかよし班活動」や「よいこと見つけ」などを通して、互いの良さを認め合い、よりよい生き方を求める子供の育成を図っていききたい。	3.6	3.6	・「学校が楽しい」と答えた児童が100%であり、親もそのことにほっとしている。これからも少人数学校ならではの方法で、良好な仲間関係の育成を図ってほしい。 ・いじめは、大なり小なり必ずあるという認識で、未然防止に今後も努めてほしい。 ・頑張りすぎてしまっている子に対して、教師はしっかりと注意を払ってほしい。
	2	いじめやいじりを見逃さない感覚の醸成を育む、温かな学級経営に努めているか。				○何か問題が起きた時に、素早い指導ができています。 △いじめに対して心配だと感じている保護者が少数でも存在するかがり、安心できる居場所づくりをさらに努めたい。		3.7		
	3	「よいこと見つけ」の充実が努めているか。				○よい姿をその場、その瞬間に褒め、「よいこと見つけカード」でさらに褒めるといった繰り返して積み上げて、子供たちに自己肯定感を高めることができています。		3.8		
	4	昼休みミニ支援会議を起動させた小規模校なりの組織的な指導と支援が充実しているか。				○問題に対して全職員で共通理解を図るよう努め、全職員で一致して対応する動きができています。		3.4		
かしく 「創造する力」	5	算数科複式指導を核に、主体的に学ぶ複式少人数指導の充実が努めているか。				○子供たちを「算数リーダー」として鍛え、「自分たちで授業をつくっていく」という意識を高めることができています。	かしく「創造する力」 ○授業は、おおむね分かりやすいと児童はとらえている。少人数ならではの良さを活かした指導を続けたい。 △今後は、子供同士が学び合う授業、「聞く」を中心とした学習規律の育成、家庭学習の充実により子供たちの学びにおける自立を図り、さらに一層の学力の定着を目指していきたい。 △家庭学習については、「家庭学習パワーアップウィーク」の取組をより充実させ、家庭との連携を図っていききたい。	3.7	3.2	・複式指導を核にして学ぶ姿を伸ばす方向はよい。より主体的に学ぶ子供を育ててほしい。 ・家庭学習を行って当たり前のこととしてやり切らせることが大切である。 ・家庭学習について、さらに保護者の意識・教育力を高めていく必要がある。家庭と連携を図るといった改善策はよい。 ・他校の児童と共に活動する場を設けるなどして、多様な仲間と学び合う活動を積極的に検討してほしい。
	6	学び合いの定着に努めているか。				△子供たちが、交流することが当たり前と思えるよう指導していききたい。		3.3		
	7	「聞く」の指導を徹底させているか。				△相手に体を向けて話を聞く、聞いて反応するといった姿勢をさらに指導する必要がある。		3.7		
	8	家庭学習の充実が努めているか。				△家庭学習の見届けの協力をお願いするなど、家庭との連携をさらにしていきたい。		3.7		
たくましく 「自立する力」	9	ノーチャイムでの時間行動が定着できているか。				△休み時間が短く、時間内に教室移動ができない。また、時間がないから廊下を走ってしまう。	たくましく「自立する力」 ○ふるさと教育や全校宿泊学習の取組等により、子供たちが自分に自信をもち、ふるさとに誇りをもって、自立する力が育ちつつある。 △ノーチャイムでの時間行動のために、日課に余裕をもたせる検討を行いたい。 △「もくピカ掃除」や「ちょボラ」活動により、子供たちに他者に貢献することの素晴らしさをさらに感じさせたい。 △防災教育については、中学校区での合同引渡し訓練や防災備蓄倉庫見学などの学校の活動が十分に家庭で活用されるに至っていない。各家庭での防災について、子供たちが家族と語り合うなどの活動を通して、家庭との連携を強めていきたい。	3.2	3.2	・「ノーチャイム」の意図は分かるが、家庭でも学校でもねらう姿に近づいてはいない。チャイムできちんと動けることをまずは大切にすべきであると思う。 ・オブラートに包むように過剰に親切丁寧な指導を行うのではなく、我慢を乗り越えるような精神的な厳しさを伴う体験も仕組んでほしい。中学以降の仲間関係を心配する保護者の声もあったが、自信と誇りをもって自立していく姿を目指して、さらに取組を工夫してほしい。 ・積雪時の登下校の安全確保は苦労が多いだろうが、引き続き万全を期してほしい。 ・登下校の見守り体制を今一度検討してほしい。 ・ふるさと学習や防災教育など、地域との連携を図るうえで、地域に対して学校の情報をさらに積極的に発信していくとよい。 ・防災教育の評価が、保護者と職員とで反転している背景には、最近頻発する各地の災害に対する保護者の不安感の高まりがある。さらに日常的に実際の災害に即した命を守る訓練の実施を望む。
	10	適切な言葉遣い、さん付けを定着できているか。				○さん付けが子供たちに浸透している。 ○不適切な言葉遣いのは、その都度指導できている。		3.8		
	11	「もくピカ掃除」の充実が努めているか。				△「もくピカ掃除」が子供たち理解されていない。主体性もあまりない。チェック時の判定もあいまい。箇所ごとに責任をもって行うやり方に変更をしていきたい。		3.3		
	12	全校宿泊学習等の行事を活用したリーダー育成、考えさせる（任せて見守る）指導に努めているか。				○高学年は、自分が全校を動かす、という意気込みで活動していた。 △リーダーをもっと活躍させたい。そのために、見通しと計画をしっかりと持たせ、時間内にできることを考えて動けるように指導したい。		3.3		
	13	「ちょボラ」活動の推進に努めているか。				○進んで「ちょボラ」を行う姿が増えてきている。		3.0		
	14	投げかけ考えさせる防災教育を工夫しているか。				○訓練時だけでなく、普段から「こんな時はどうする？」という投げかけを行っている。 △家庭や地域と連携した防災教育を行っていききたい。		3.3		
	15	安全な登下校の自立に努めているか。				△バス停までの職員の下校指導は、子供たちの大人への依存を招いてしまっている。下校指導は年度の初めだけでよいのでは。		3.2		
	16	イワザクラ栽培、アマゴ飼育、ふるさと祭り等のふるさと学習を通して、ふるさとのよさを伝えられているか。				○イワザクラの保護、アマゴの飼育、化石探し、葛原大鼓、昔遊びなど、地域の方々は本当によくしてくださっている。 △子供たちのふるさとに対する思いが十分には醸成されていないので、教師が折に触れて語るなどの手立てが必要。		3.5		